

法華經の功德（『身延山御書類聚』より）

『上野尼御前御返事』（定本一八九〇頁・文永十年）

（本文）

嚙^{しらよね}牙一駄「四斗定」・あらひいも（洗芋）一俵送給て南無妙法蓮華經と唱へまいらせ候了。

妙法蓮華經と申は蓮に譬られて候。天上には摩訶曼陀羅華、人間には桜の花、此等はめでたき花なれども、此等の花をば法華經の譬には仏取給事なし。一切の花の中に取分て此花を法華經に譬へさせ給事は其故候なり。

或は前華後菓と申て花は前菓は後なり。或は前菓後華と申て菓は前花は後なり。或は一華多菓、或は多華一菓、或は無華有菓と品々に候へども、蓮華と申花は菓と花と同時也。一切經の功德は先に善根を作て後に仏とは成と説。かゝる故に不定也。

法華經と申は手に取ば其手やがて仏に成、口に唱ふれば其口即仏也。譬ば天月の東の山の端に出れば、其時即水に影の浮が如く、音とひびきとの同時なるが如し。故に經云若有聞法者無一不成仏云云。文の心は此經を持人は百人は百人ながら、千人は千人ながら、一人もかけず仏に成と申文也。

（現代語訳）

白米一駄（四斗定）ならびに洗い芋一俵お送りいただき、感謝の心をこめて南無妙法蓮華經とお唱えした。

妙法蓮華經とは蓮華にたとえられている。天上界では「摩訶曼陀羅華」、人間界では「桜の花」これらはすばらしい花であるが、仏はこれらの花を法華經のたとえとして採用なさらない。すべての花の中から取り分けて蓮華を法華經のたとえになさったのには、はっきりとした理由があるのである。

そもそも花には、「前華後菓」といつて花が前に咲き果実が後になるものがあり、あるいは「前菓後華」といつて果実が前になり花が後に咲くものがある。その他、あるいは「一華多菓」、あるいは「多華一菓」、あるいは「無華有菓」と多くの種類があるが、蓮華というのは特別で、果実のなるのと花の咲くのとが同時なのである。

法華經以外の一切經の功德は、先に善い業因（ごういん）の花を咲かせて、後に仏の果実がなると説かれる。ゆえに仏の果実を結ぶかどうかは決まっていらない。ところが法華經というのは、手に取ればその手がたちまちに仏になり、口に唱えればその口がそのまま仏であるのである。たとえば天の月が東の山から出ると、そのとたんに水に月影が映るようなものであり、音と響きとが同時に鳴るようなもので、ゆえに法華經の方便品に「もし、法を聞くことがあろう者は、一人として成仏しないことがない」とあり、この一節の内容は「法華經を受持する人は、百人なら百人すべて、千人なら千人すべて、一人も残らずに仏になる」というのである。